

(課題：本を読んで旅に出よう！モチベーションがあがる、行動させたいくなる本
(ガイドブック除外))

世界のどこかにいるまだ見ぬ友人たちへ

Twitter (現、X) に自動翻訳機能が実装されて久しい。実装直後は、「バベルの塔が崩壊する前の、言葉が分かれる前の世界ってこんな感じだったかな？」と思わせるような感動があった。世界中の人が言語の壁を越えて自国の美味しいものを紹介し合い、シャイな日本人が冗談を言って世界を驚かせた。タイムラインの一部を切り取れば、そこには平和そのものの景色が広がっていた。案外、言葉が通じ合えば世界のあらゆる問題は解決するのかもしれないとさえ思った。

私はもともと言語が好きで、言葉の語源を辿ったり、同じ言語でも国によるイントネーションの違いやこだわりを知るのが趣味だった。その中で、私が最もロマンを感じている言語が、「エスペラント語」という国際人工言語だ。「世界中の人が対等に話せるように」という理想を掲げ、十九世紀末に作られたこの言葉は、特定の国の歴史や権力に縛られない。誰もが学習者として対等に会おうのである。

旅というと飛行機に乗り、遠くの国に行くことを想像する。しかし、言葉を学ぶこともまた旅の始まりではないだろうか。この本は特定の国へのガイドブックではない。まだ見ぬ世界中の友人と繋がるためのパスポートだ。

エスペラント語の世界には「パスポルタ・セルヴォ (Pasporta Servo)」という文化がある。これは世界中のエスペランティスト (エスペラント語話者) が旅行者を受け入れるネットワークで、「エスペラント語を話せるなら泊まっていいよ」という仕組みである。もちろん、女性の一人旅には安全面の配慮も必要だろう。でも、妄想するのは自由だ。本書を読んでいると、地図上に並ぶ国名が、観光地ではなく「同じ言葉を学ぶ仲間がいる場所」に見えた。

世界のどこかにいるエスペランティストに会いに行きたい。まだ顔も名前も知らない。しかし同じ言葉を学び、同じ理想に惹かれた人がいると思うだけで世界は少しだけ近くなる。昨年、万博で出会った人々がそうだったように、遠い国の誰かもまた笑い、食べ、暮らしている。この本は観光地を案内する本ではない。けれど、私を旅へと駆り立てる一冊である。